

## 平成25年度秋田県産業教育審議会議事録（要旨）

1 日 時 平成25年10月28日（月）13：30～16：00

2 開催場所 秋田県立金足農業高等学校

3 出席者 11名

小川 信明 （秋田大学大学院工学資源学研究科長）  
三栗谷俊明 （国際教養大学キャリア開発センター長）  
有田 正司 （株式会社 花徳 代表取締役）  
佐野 元彦 （株式会社 サノ・ファーマシー 代表取締役社長）  
泉 牧子 （JA全農あきた営農支援部営農支援課参与）  
大高 富子 （株式会社 ハムセンター秋田 専務取締役）  
大日向直美 （株式会社 大日向 代表取締役）  
水澤 聡 （秋田県産業労働部産業政策課長）  
長澤 公生 （秋田県中学校長会会長）  
西 聡 （秋田県高等学校教育研究会工業部会長）  
矢田部 晃 （秋田県高等学校教育研究会農業部会長）

4 議事内容

- (1) 開会
- (2) 教育委員会挨拶
- (3) 委員紹介
- (4) 農業科授業参観
- (5) 協議

高等学校における産業教育の改善・充実策について  
～専門的な知識・技能を高める実践的な教育の充実について～

5 協議概要

議長

秋田大学も改革の時期である。今月中に大学設置審議会の結果が出て、来年度から理工学部と国際資源学部になる予定である。特に理工学部では、本日のテーマにあるように「実践力」をもったものづくりができる人材を育てたい。

最近、表情に乏しい学生が多いが、そのままでは、企業が新入社員教育に戸惑い、なかなか実践的な能力を身に付けることができないことになる。その点、金足農業高校の生徒さんはなかなか実践力がある。このようなことを目指した教育について、皆様から御意見を伺いたい。

事務局	説明（省略）
議長	<p>皆様から様々な御意見を伺いたい。</p> <p>これまではインターンシップという方法が主流であるが、なかなか本当の意味で中に入り込んで実際に仕事をしていくというのは、あまりできていないような気がする。大学としても、（事業所に）お願いをして学生を派遣しているが、企業の方にとっては少しお荷物的な面があったかもしれない。お互いが有意義になるような関係を上手く作れないものか。インターンシップというと学校側からの教育という感じで、あまり積極的でない企業も少なくはないのではないか。地元の中学校、高校、企業の方々が考えられるようないい方策はないものか。そのような観点でお話を伺いたい。</p>
C委員	<p>私は薬局を経営している。薬局の場合は薬剤師という専門資格が必要であり、いわゆる「総合的な学習の時間」や「職業体験」で学生が来ても、調剤の仕事をするのは現実的には難しい。一般の薬品の陳列や整理、レジ打ち等は可能である。業種によってもかなり異なる。</p> <p>地域イベントに関わっていくことはいいことであると思う。例えば湯沢翔北高校を中心に湯沢市、雄勝郡の高校が「うどんEXPO」に深く関わっている。過去2年間は当日の運営ボランティアだったそうだが、3年目の今年は企画段階から高校生が関わって、一緒にイベントを作り上げてくれている。できれば、そのように地域イベントの企画段階から関わっていくことが必要であると思う。ただ、その情報がどうやって学校に入ってくるのか、地域イベントをやっている方々が、学校に話してもいいのかどうか躊躇する場面もあると思う。情報のコーディネートあるいはマッチングの仕組みを作るのが課題であると感じる。</p>
議長	<p>企画の段階から参加するほうが、子どもたちもやる気になる。自分が関わっているということが見えてくる。地域の人にとっても、結局長く付き合うことになるので、お互いいい面が出てくると思う。秋田大学でも「いぶりがっこ」の商品開発の事業で、農家の方々とも仲良くなり、地域もよく知り、学生にとってもいい体験になった。ものづくりという意味でも、非常に効果的な教育方法ではないかと感じた。一方で（消極的で）全く手を挙げない学生もいる。</p>
B委員	<p>かつて、いくら募集しても人が来なかった時代があった。今はまったくそうではなくなった。ひとつ（の理由）には、時代がある。もうひとつは、子どもたちに来てほしい会社と、来てほしくない会社があるということ。来てほしい会社には、まったく知らない人たちをどうやって育てていくかというノウハウがある。それを実践してみたいという、とてもいいサイクルが生ま</p>

れてくる。一方、来てほしくない会社で無理やりやろうとしても無理がある。また、子どもたちの中でも、行きたい子どもと、行きたくない子どもがいる。そのあたりを上手く調整することが必要である。

地域と学校をつなぐものとして、最も端的に媒体となるのは「同窓会」である。商業高校の場合は、地域とほぼ直結している。そのあたりのやり方（調整の仕方）が課題である。

議長

一時期に比べると、やる気のない学生が減ってきたのは確かである。お尻を叩かないとやらない学生、まったく関心がない学生もいる。その学生は、能力がないわけではない。そのような学生に、興味があることを引き出しながら、いかにしてやらせるか。

D委員

以前、秋田県高等学校産業教育フェアの「研究発表・体験発表」を拝見する機会があった。高校生とは思えないような専門的な取組の発表を聞いて、産業教育の奥深さを感じた。

その中で、最優秀賞（大曲農業高校）の発表では、近所の川原に毎年フキノトウが咲いていたが、今年から咲かなくなった。原因を考えたら、いつも土手を整備していたおばあさんがいなくなったという、身の回りの現実に気付いた。そして、地域を巻き込んでフキノトウを再び咲かせたという体験の発表であった。産業教育を勉強している生徒さんたちの、一つの物事を見る目が深いということにとっても感動した。

私は普通高校の出身で、何が自分の中で得意なのかあやふやなまま半世紀も生きてきた。専門高校の生徒たちは、常に自分のやりたいこと得意なことを見つめているので、地域で見守っていかなくてはならないと感じている。

先ほどの、企業の受け入れ態勢という点については、私は4年ほど行政機関にお世話になっており、行政機関では公務員志望の生徒を受け入れていて、公務員でもそれぞれの専門部署があり、例えば、農業高校の生徒が農林課に配属になってグリーンツーリズムを勉強したりするので、一般企業だけでなく、行政という世界の中でも、つながりをもう少し強力にしても専門性を発揮できるのではないか。

議長

大会に出場するような生徒は、秋田県は全国的にも優れているように思う。それがなかなか表に出ず損をしているような気もする。「この取組は日本一のレベルである」と伝えてやれば、「地元の人でも起業化できる」と思うのかもしれないが、（個人的な意見だが）少しそのあたりが秋田は損をしていると感じる。優れた人材、優れたチームは確かに存在するが、実際の産業の振興にまだつながっていない。それがうまく生きてくれば、そこに雇用も発生し、いい循環になると思う。

C委員

さきほど、地域のイベントに出ていくという話をしたが、「来てもらう」

という意識も大切と感じる。産業教育フェアが、どれだけの人たちに来ていただけているのか。また、専門高校の場合は、学校祭が様々な触れ合いのきっかけになるのではないか。そのような意味で、在校生や保護者だけでなく、同窓会、地域住民、中学生や中学校の先生、(関連する学科の) 大学教員等の方が来て、成果物等を見ていただくことが大切である。

B委員 例えば、農業高校の文化祭に工業や商業の生徒も参加すると、すごく面白くなるのではないか。

C委員 商工会議所、地元の商工会、J A、経済団体等に対し、学校祭への案内を送るなどして、学校祭を活用して触れ合いのきっかけを作る機会とする手はあると思う。

議長 最近の(大学の)学園祭も様変わりしている。地域の方々、卒業生、企業の方々に来ていただければ、違う展開にもなり得る。

J委員 昨日文化祭であった。外部から多くの人が訪れ、農作物をたくさん買っていただいた。体育館での研究発表等も聞いていただきたいのだが、そちらにはなかなか足を運んでいただけない。「田沢湖の中性化」や「キノコの研究」など様々な発表をしており、外部の方々にお見せしようと頑張っているが…。  
地域に必要とされているものは何か、という視点だと、「田沢湖の水が酸性で困っているので、何とかしたい」「キノコの生産では、安全で安心な国産の培地を使えないか」というアイデアが生徒たちから出てくる。また先日、全国の農業クラブの大会があったが、最優秀賞が「京野菜」をテーマにしたものであった。これも、生徒たちが地域において何が必要とされているかを研究した成果であった。これも大切な視点である。

議長 非常に重要なことであると感じる。企業や地域が求めていることと、教員や生徒が考えているものが必ずしも一致しないことがある。自分が困っていること、自分の家が困っていること、自分の地域が困っていることを助けることができると思えば、それがやる気になるきっかけになるだろう。身近なものに興味を感じてもらうことも必要であろう。

E委員 毎年、新規高卒者を採用している。来年度も8名採用する。雇用についても、地域に役立ちたいという観点から、新規高卒者を採用している。  
(授業参観を通して) 高校生が生き生きといろいろな専門分野を勉強し、それなりに成果も出ているということを見出し、素直に凄いなと感じた。学校でそのような学習をしてきた生徒たちが、実際に社会に出るときに、本当にマッチングしているのかが疑問に思う時がある。  
受験する生徒のほとんどを採用しているが、新規高卒者で実際どれだけで

きるのか。当社でも、すべての店舗、部署において、企業見学を積極的に受け入れているが、入社後辞める人もいる。ギャップがあるというのが主な理由である。礼儀、言葉遣いなどの基本的なことが高校で身に付いていない。入社後も教育はしているけれども、ぜひ「礼儀」「言葉遣い」はせめて身に付けてほしい。

C委員 学校というよりは家庭教育の分野である。高P連の関係者として反省をしている。

E委員 もちろん家庭も大事であるが、家庭では敬語はなかなか使わないだろう。やはりカリキュラムを作った上での教育が必要であると思う。

I委員 本校の場合、運動部に所属している生徒が多く、毎日元気のいいあいさつが飛び交っており、部活動での礼法指導がいい様になっていると思う。企業の方々からは、専門性よりもあいさつ、コミュニケーションをしっかりできるようにとよく言われる。学校の中だけで考えると、生徒が外の世界を知らないというのもあるので、特に我々のような産業教育に携わる者としては、生徒を学校の外に出すことが非常に有効と考える。前任校の例だが「うどんEXPO」には、第1回目から参加してきた。学校ができた年であったので、地域にも認知してもらいたいという思いもあり、とにかく地域との関わりを大切にしたい。「うどんEXPO」はその中の一つ。地域も力が入っており、学校も「高校生の力が必要とされている」と生徒に伝えその気にさせた。生徒は声を枯らして呼び込み等頑張っていた。「たくさんの方が来てくれて、楽しくてやりがいがある」と話していた。また、呼び込みだけでなく、裏方の仕事も黙々とこなした。イベント終了後、高校生に対する絶賛の声をたくさんいただいた。地域と関わって自分たちにもやれることがあった、という気持ちが芽生えた。それが2年目、3年目に伝わっている。「うどんEXPO」は高校生なくしては成り立たないイベントとなっている。

熱が冷めているような生徒もいないわけではないが、生徒たちは大人に声をかけられることによって本気になってくるものである。学校は、生徒に活躍の場を与えることが大事だと思う。また、地域の方々の温かい声が、生徒のやる気をさらに引き出す。商業にしても工業にしても、学校での机上の学習ばかりでなく、それが実際どのようなところで生きるかは、外に出てみてわかることである。高校生のうちから積極的に外に出して、自分たちの勉強が大事だということを実感としてつかませたい。そして、様々な年齢層の方々に関わることにより、挨拶や言葉遣いを含めたコミュニケーションも勉強させたい。産業教育により実践力をつけるには、学校だけに留まるのではなく、どんどん売り込んでいくこと、生徒をできるだけ地域に出して活躍の場を与えて、やらせてみるのが大事だと思っている。

- A委員 外に出る、異世代と触れるというのは、大事なことだと思う。  
先日、あるガラスメーカーの方と会い、「メーカーとして新規高卒者に求めるものは何か」と尋ねた。「専門性は入社後教えるので必要ない。それよりも環境適応力と、チームで何かできること、この2点だけでいい。」との回答であった。今日の趣旨とずれるかもしれないが、まさにそうだと思う。環境適応力とは、恐らく異なる世代の人とうまく（やりとり）できる、考え方の異なる人と（やりとり）できることではないか。
- また先日、美郷町出身の日本航空秋田支店長の方がお見えになって、「これほど秋田が疲弊しているとは思わなかった。若者に元気がない。我々に何かできることはないか。」と話されていた。高校生、大学生を含めて、若い人たちで“なかいち”でなにかできないか、という話になった。秋田のイベントというのは、単発で終わってしまっって系統立てられていない。みんな点で終わっていて、なかなか線になっていない。できれば、行政で糸をつけるような仕組みを作っていただきたい。行政の力を借りて、一緒に何かをやるという事も必要だと思う。
- 議長 点を線に、さらに面にしていくということは、とても大きなことであると思う。
- F委員 弊社では毎年、高校生の職場見学を受け入れている。ある年、新規高卒者を3名採用したことがあった。本来であれば2名募集のところ、1名増やして採用した。ところが、男子は1か月ほどで辞めてしまい、女子2名は2年ほどしてから次々と辞めてしまった。社員は年齢層も幅広く、怒られると泣いてしまった人もいた。もう少し元気はつらつと、性格的に続いてくれるような人であればと思う。そのような生徒に育ててほしいと思う。
- 議長 大学生でも、怒ると来なくなったりする者もいる。
- A委員 少し前までは、大学生に「頑張れ頑張れ」と言うのと頑張ってくれた。しかし最近では、「これ以上どう頑張ればいいのか」と言われてしまう。それ以降我々は「応援している」という表現に変えた。
- E委員 弊社では、2歳以上年上の方は新入社員に直接指導しないことにしている。2年先輩がちょうどいい。それより上の先輩が指導すると、きつくなってしまう。
- F委員 (新入社員の) 顔色を見て、気を遣いながら対応している。
- E委員 会社に入ると、様々な年代の方々と接していかなければならない。お客様も年齢層がかなり広い。学校での敬語と職場での敬語はまったく異なり、通

用しない。運動部で鍛えられた生徒さんはとても元気があるが、会社ではそれではだめである。社会にはきちんとした敬語があり、それが身に付いていないとコミュニケーションをとれずに、結局引っ込んでしまう。

議長

やる気を出させて、仕事ができるようにするためにはかなり手間がかかる。我々もだいたい3年かかると言われてきた。しかし、社会で教育している内容が今では全然違う。時代が変わってきており、難しいところである。

専門教育に話を戻したい。専門性はいらない、という話もあったが、これについてはいかがか。学生はそもそも専門を学んでいる。企業の方、高校の先生方にも伺いたい。専門性と実践力、教育側と世の中がミスマッチしているのがあるかもしれない。大学も課題としている。

B委員

自分を振り返ってみると、私が高校を卒業したのは昭和40年代半ばであった。その頃秋田商業高校を卒業した生徒のほとんどは、都市銀行等の金融機関へ就職した。卒業したら社会に出るんだという思いが強かった。そこで役に立ったのは、そろばんであった。電卓がなかったその頃は、そろばんは極めて有効な手段であった。しかし、すぐに役に立たなくなった。

また、就職が引く手あまたであったのは、運動部の生徒であった。企業側にとっては、根性があるからどんなことをやらせても大丈夫だという意識があったと思う。そんな時代であった。

しかし、会社に役に立つ人材を育てて（製造して）渡す（納品する）のが学校の仕事なのか、そうではないのではないか。社会とはもっと豊かなものであって、企業だけが社会を形成しているのではない。学校を出て社会に出る、その社会というのは企業だけではない、というのを60歳過ぎて初めて分かってきた。世の中は、我々が考えていたほどちっぽけなものではない。

A委員

（授業参観で）3坪の庭を見せていただいた。最初に説明してくれた男子生徒が「利休」について話してくれた。専門的な造園の話だけでなく、教養的な部分もしっかり勉強しているのがとてもいいと思った。ただ手法だけを教えるのではなく、幅広い知識を専門教育の中に含んでいるのであれば、その専門教育は意味があると思う。今は時代のスピードが早いので、自分の中で考えて応用していく力をつけないと対応できない。頼りになるのは、手法ではなく付加価値の部分である。

I委員

工業高校が最も得意とする分野はものづくりである。以前（高度経済成長期）の工業高校は、即戦力として期待され、全国にどんどん工業高校ができた。ほとんどが卒業後就職し、現場で活用されてきた。学校でも、それに対応すべき最新鋭の機器を導入し、就職しても困らないよう対応してきた。

今の時代、技術の進歩はものすごく速く、それに学校の設備がなかなか追いつかないのが現実。誤解を恐れずに言えば、工場で、例えば自動化された

機械をボタンで操作していただくだけであれば、まったく経験のない普通高校出身の生徒でも順応できる。では、工業高校出身者に何を身に付けさせるかならば、最新鋭機器の操作技術を覚えるというよりも、何を作るか、どのような手法で完成品に仕上げていくかという、いわばアプローチの仕方を重視したい。作っても活用されないようなものでは意味がない。それより、人の役に立つものづくりをしなければならない。作ったものを現場に持ち込んでうまくいかないのなら、どこがだめなのかを自分で考え試行錯誤して、作り変えてまた現場に持っていく。そのプロセスが大切だと思う。そのプロセスは教科書には書いていないから、自分で何回もやって体得していくしかない。工業高校ではそれができる。

地域に出ていき、何があれば役に立つかニーズを感じながらどうやって実現していけばいいかというセンスを磨き、コミュニケーションをとり、そして、作ったものが人の役に立ち喜んでもらえれば、自分にとっても励みになる。そのようなことを語ることができる生徒を育てたい。学校の中だけでやっていくと、どうしても実践的なところまでやっていけないので、地域と関わっていきたい。課題研究で、特別支援学校に行ってもものづくり活動に取り組んでいる例もある。このような取組が非常に大事だと感じているところがある。

C委員

今のお話は非常に重要だと感じた。我々の反省であるが、秋田県の製造業（農業も含めて）のこれまでの弱点は、マーケットを見ないということであった。市場を見ないで生産してきたので、何が求められているのか、それを提供することができていなかった。そこを学生たちが考えて、そういうセンスを身に付けることは重要である。

議長

例えば、スマートフォン（多機能携帯電話）を最初日本では作れなかった。日本には技術はあったが、発想がなかった。ニーズをつかめなかったのかもしれない。発想を磨く、ニーズを取り入れるということを教育の中に取り入れていければ、日本の将来、秋田の将来は明るいかもかもしれない。ものすごく高度でなくてもいい。

C委員

身近なところにもヒントはたくさんある。特別支援学校での取組は非常に素晴らしい。家庭の中でも、おじいちゃんおばあちゃんが困っていることでもいいと思う。こんなもの作れないか、こんなサービスは可能か、とか。

議長

特に秋田県は高齢県であるから、そのようなニーズを、高校生や大学生が上手につかまえることができればいい。我々の世代では、なかなか発想が生まれにくい。ある意味、教育していかないとできないことでもある。そのような専門教育が必要なかもしれない。そのためには、基本的な専門知識は必要であり、その知識を上手く活用できていないのかもしれない。

G委員           ものづくりという点では、秋田県の産業構造は下請け型であり、最終製品には至っていない。由利地域の大手部品メーカーの構造改革が、県内の取引企業へ影響を与えている。産業構造を、下請け型から変えていく必要があるだろう。大手や誘致頼りではなく、それはそれとして進めながら、地元の中小企業をしっかりと育成しようということで、秋田県中小企業振興条例(仮称)を作っている。

下請け型から抜けるためには何が必要かという点、新しいものにチャレンジすることである。チャレンジしないと次の商売はない。専門分野を使いながらチャレンジすることは、特に産業教育の中では取り組みやすいのではないか。チャレンジする気持ちを持った生徒の育成が、自ら新しい製品を作ることや、ビジネスに取り組むことにつながると思う。

先ほど「プロセス」という話があったが、そのプロセスを専門教育を通して学んでいければ、人材育成という意味でいい教育ができていると思う。

議長           全国的な例では、大阪の中小企業は、大企業だけにぶら下がるのをやめようとしている。そのためには、やはりチャレンジ精神がないとダメであり、人材を中学生や高校生の段階から育成していかないと難しい。これまでの構造を少しでも変えていかなければならないという危機感である。

G委員           東大阪はものづくりの町で、「まいど1号」という人工衛星プロジェクトがある。株式会社アオキの青木さんのお話を伺う機会があった。周囲を巻き込む力、少々のことでもへこたれない粘り強い取組があった。周囲を巻き込んで、航空機産業にチャレンジしており、高い技術を持ちいい仕事をしている中小企業である。青木さんは、「秋田の人はずるい。自分から積極的に動いていない。」と言っている。

議長           教育の現場からも大いに発信していかなければならない。秋田にとってはとてもいい話であったと思う。宇宙産業については、秋田大学でも能代の宇宙イベントを通してやろうと考えている。そのようなイベントにより、地元の人もやる気が出てきて、町を開放してくれたりする。

秋田県は、中学、高校、大学と遊離しているような感じがするがどうか。

H委員           小学校と中学校は、ほとんどの地域で連携しているが、中学校と高校は少ない。秋田市内に限って言うと、近々中学校と高校の校長による情報交換の会合がある。また、高校のインターンシップと中学校の職場体験がリンクされているかどうか、連携の指標となる。中学校では短くて2日間、長くて5日間職場体験に出向いている。高校に進学後、中学校と同じ職場に行くとは限らない。中学校の段階で、ある程度将来を意識した上での進学先(高校)を選択させている。中学校と同じところで、インターンシップができないも

のかと思う。

また、農家での職場体験は、中学生の職業意識を高めるのに大いに役立っている。仙台市では、3日間の職業体験ができるよう、仙台市教育委員会が企業と交渉している。本県では、生徒が自分で探すのが原則となっているが、秋田市内では現実的には不可能である。行政側で集約するなどある程度やってもらいたい。

以前高校に勤務した時、盛岡農業高校を視察する機会があった。(大学の)研究室のような雰囲気であった。パンの製造、販売もしており、学校を外部にアピールしていた。

私も、工業高校の電気科の卒業である。当時は、専門高校を卒業するとほとんどの生徒が就職していた。電気科であれば、大学へ行くか家業を継ぐ以外は、ほとんどが電力会社等への就職であった。電気科であれば電験3種や電気工事士の資格を在学中にとり、就職に生かした。高校で学んだ専門知識が生かせるような企業が県内にもう少しあればと思う。

議長

中学校と高校の連携は、もう少しあったほうがいいかもしれないと思う。我々は、高大接続とか高大連携と言っているが、それと同じように、中学校と高校が連携すると、全体的な底上げにつながるのではないかと。

C委員

先日、高P連の県北地区交流大会が大館市で開催された。大館市の教育長が、「大館市は零歳から20歳までの縦の教育(縦軸の連携)をする。」と宣言されていた。大館市の人口は7~8万人ほどであり、この規模だからこそできるかもしれない。秋田市の30万人規模では難しいかもしれない。県内は同程度の規模の市がほとんどなので、各市でもできるのではないかと。

D委員

産業教育の成功体験が生徒にとって自信となり、社会人になったときに役立っている。JAに就職した際に感じたが、仕訳帳等を学んでから入ってくるのと、私のように何も知らないで入るのとでは、スタートから全然違ってくる。

一方、自信を持って産業教育を学んできたけれども、専門と異なる進路に進んだ場合のようないわば不成功体験を、様々な連携(縦の連携、地域の連携)の中で、他産業との連携として生かすこともこれからの産業教育では必要であると思う。

マーケティングの話があったが、このようなセンスを磨くのも高校生のうちに身に付けるべきである。例えば、お米で売なのか、あるいはご飯で売なのか、そのようなセンスを磨くのも専門教育の中の一つである。

事務局

以前は、専門を学ぶと、関連のある専門の企業に就職するのが普通であったが、今は様変わりしてきており、どう対応していくかが課題である。企業側からは即戦力という言葉をよく聞くが、高卒後でも大卒後でも簡単なもの

ではない。また、工業高校の機械科を出たからといって、どんな分野にも応用が利くかといったらそうではないが、様々な業界から「溶接だけはしっかり…」「3D-CADの基礎だけは…」と要求される。

教育委員会としては、専門高校生に今求められるものは何なのか、常に模索しているところである。その中で、課題解決能力をいかにしてつけていくかが大きいと感じている。各専門分野における課題解決能力とは何なのかを、各学校等で考えながら身に付けさせ、課題解決能力に必要な基礎基本を我々がつけさせるべきと思っている。

本日は各方面から多面的な話を伺うことができ、大変参考になった。プロセスの大切さや、ニーズをつかむことなど、今後の産業教育に生かしていきたいと考える。

議長

専門教育をどのように教育するか。今は、時代の流れが非常に速い。そろばんが電卓、パソコンに代わり、これも何年かしたらどうなるかまったくわからない。次のことに向かって新しいことを勉強できるような能力も必要ではないか。専門分野を再び勉強できるような能力がないと、どんどん社会から切り捨てられていく人になってしまうので、ここをもう少し考えたいと思うが、なかなかすぐには難しい。

これまでをまとめると

- ・地域や社会のニーズをうまくつかめるような能力の育成が大切である。
- ・チャレンジする心を育てる教育が、実践的な教育につながる。
- ・礼儀や言葉遣いの育成を教育の中に取り入れる。
- ・縦の教育の充実が必要である。

であったかと思う。以上で審議会を終える。